Field+PHOTOGRAPHY

フィールドで人を撮る

上岡弘二　かみおか こうじ /AA 研元所員

長年、イランの言語研究とシーア派イスラームの民間信仰調査にとりくんでこられた上岡さん。現在もご自身のフィールドであるイランをはじめパキスタン、ブルガリア、トルコなどに足を運び、イスラーム圏でも女性の美しい写真をとって来られる。その秘訣をご紹介いただこう。

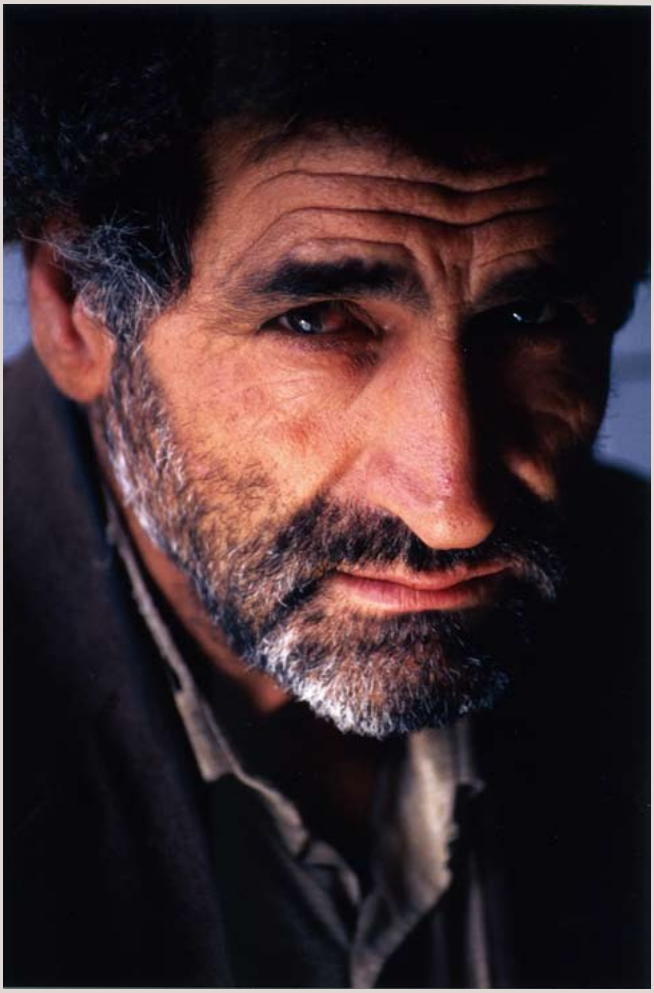
写真は、人物に始まり人物に終わる。撮りやすくて、撮りにくい。一期一会のフィールドで、それなりの写真を撮るためのノウハウを、下手の横好き体験から記してみる。

人を撮るのとモノを撮るのとは、同じでない。人の場合には、撮る者と撮られる者の関係性が問題になる。撮ることによって関係性を結ぶこともできる。即背面モニターで画像を共に見ることができるデジカメは、まさにしかり、関係性を結ぶ最高の小道具。活用しない手はない。

●間合い

まず、被写体との間合いの取り方。2～3 枚しか撮らないのならば、「3 歩前へ!」。これまでより 3 歩間合いを詰める。素人は、相手にかかわらず、ほぼ 3m の間合いで撮る。これでは間が空きすぎ。3 歩前へ出て撮るためには、被写体とのそれなりの関係性が要求される。「3 歩前へ !」で格段に腕が上がる。人を撮るなら、騙されたと思って、これだけはやってほしい。

イスラーム圏では、男性が成人女性を撮るのは容易でない。奥義があれば筆者が教えてほしいところであるが、それでももちろん女性を撮っている。まず子どもから始める。子どもを撮って文句を付ける人はいない。バシャバシャ撮る。ついで男性をきっちりと撮る。時間をかけて男性を撮ることが、次へのステップになる。その後で子どもと女性。そして、やおら女性のみを。この手でいつも成功している。イスラーム圏のだれもが写真大好き。いったん男性が黙認する雰囲気になれば、女性も、晴れ着に着替えたりして、われ勝ちに被写体になってくれる。



クルド人（イラン）
チャイハネの窓からの自然光をレンブラントライト（レンブラントが多用した上方、やや後方よりの斜光線）として利用。左目にも少し光が来ていることに注意。

イスラーム教徒の少女（ブルガリア）
視線の向く左手を空けている。老人のときは、逆に反対側を空けて、歳月の経過を暗示することができる。ピントは必ず手前の目に合わすこと。

なお、筆者は常時、その大半が女性の人物写真の見本帖を持ち歩いている。見てもらって、「こういう風に撮りますよ」と説明すると、乗ってくるのは男性よりも女性のほうである。

●ねばる

これという人物のときは、腰をすえて撮る。調査者はフィールドで透明人間になるのが理想とすれば、撮影者としてそれに近くなるのは、数多く撮って、相手を撮られることに慣らしてしまうことである。

縦位置で構える。縦位置に構えるとは、通常の横位置と違って、それだけ撮ろうと意識することにもなる。実は、横位置と縦位置の比率で腕がわかる。上級者ほど縦が多い。

一人を、アップ、バストショット、ニーショット、全身像の 4 セットで撮る（人間は瞬きをするので、安全を考えて各間合いで最低 3 枚ずつ、合計 12 枚）。つまり、被写体との間合いを 4 段階に撮り分けるのである。ついで、横位置でもアップ、バストショットの 2 カットは押さえる。

この 4 種類の間合いでは、アップが一番易しく、全身像が一番難しい。ときにはどアップも撮っておく。寄れるだけ寄ってシャッターを押す、技術不要で度胸がいるだけ。

デジタルでは昔のようにフィルム地獄に泣くこともない、労を惜しまずど厚かましく枚数を撮るのが、なによりも上達の早道。

●構図

人物写真では、構図が大切。人物が画面の真ん中に来る、いわゆる日の丸構図を避ける。人物を関節で切らない。全身像なら足首で切らないで、つま先まできちんと画面に入れる。

人物がカメラ目線でないときは、視線の向いている方向に空きをつくる。主題が花や樹でもその向いている側を空ける。この空きは、話の間のようなもの。間をいかに活かすかが、腕の見せどころ。もちろんピントは鼻先や眼鏡にではなく瞳に。

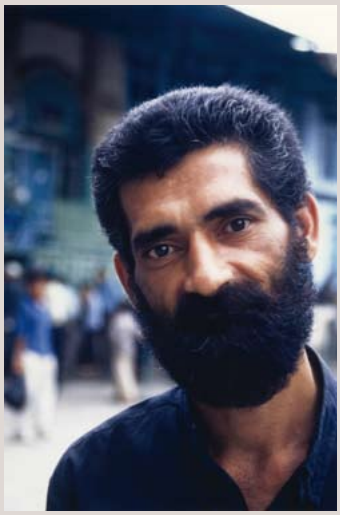
●色調

デジカメは初級機ほど、色鮮やかに写る。今もってコーカソイドの肌色が好まれるため、日本製カメラは、日本女性の肌がより明色に出るように調整してある。不況のせいもあってか、観光地のポスターの桜は、この春より鮮やかで色濃い。いわゆる印象色・記憶色であって、現実の花の色ではない。

肌の色、桜の色はさておき、資料写真を撮るときには、モノの色を正確に出すようにご注意を。そのためには、カメラ任せのオートではなく、ホワイトバランス（WC）を自分で調整する。やり方はカメラによって異なるので、取扱説明書をまじめに読んでおかないといけない。

人物写真に限らず、よいフィールド写真とは、色調が正確であることに加えて、物語を紡ぎ出せるような、いずれ現場の語り部となるような、その場の音が聞こえてくるような、リアリティー豊かな〈資料価値〉＋〈α〉のある写真のことであろう。人を撮るときは、この＋〈α〉の比重がより大きくなる。最終的にものをいうのは、撮影者の人間力。

そこで最後に、その逆が真ではない格言的独白を：優れたフィールドワーカーは写真がうまい！



ひげ男（イラン）
背景にカスピ海沿岸に特徴的な町並み、右上の空で画面に広がりが出る。フィールドでの人物スナップは、巧まざる背景説明が入っているのが望ましい。

チベット遊牧民（中国青海省）
白い帽子とバランスがとれるように風に吹かれる長髪を入れた。日の丸構図でないことに注意。

フンザの少女（パキスタン北部）
通常の子ども目線ではなく、可愛らしさを出すために上方から。瞳に撮影者が映っている。自写像でもある。

ワヒー族の乙女（パキスタン北部）
シムシャール・パミールの 4700m の夏営地にて。顔色を正確に出すことに注意した。まさにこの日焼け顔。ワヒー語は東イラン語パミール諸語のひとつ。農耕遊牧民である。

クルド遊牧民（イラン）
ヤギ毛製の黒いテントを漏れる自然光で横位置のアップ。きれいにぼけた右側の空きが味噌。

バザール商人（イラン）
どアップの一例。ピントは必ず目に。顔がやや斜めになっていること、左右の空きが均等でないことが決め手。